

YAMAKADO NEWSLETTER

NO.194

2016/01/12

山門水源の森を次の
世代に引き継ぐ会

次世代に引き継げる森に・・・



枝打ちを終えたヒノキ林(16/01/06)

今年もよろしくお願いします

本会設立から 15 年を終えようとしています。この間、次の世代に「生物多様性の森」を引き継ぐことを最大の課題として取り組んできました。その成果は着実に現れつつありますが、この活動をさらに継続するためには大きな問題も抱えています。その端的な事例を植林地に見ることができます。山門水源の森のヒノキの植栽は、1987・1988 年に実施されました。それ以降木起こし・草刈が毎年行われ、間伐が 1 回実施されています。しかしそれ以降は放置されてきました。2009 年から本会で少しずつ枝打ち・間伐を進めています。同時にシカ・



福井県側の獣害による立ち枯れ(16/01/01)

ツキノワグマの剥皮防止のテープ巻きも徐々に進めてきました。一方「守護岩」から少し北側の福井県側にはスギが植林されていますが、上の写真の様に獣害による立ち枯れが進んでいます。いずれかの日に子孫が潤うだろうと先人が汗した森です。森の仕事とはそういうものなのです。先人の思いを引き継いで行くべく「山門水源の森 2050」の議論を進めつつ今年も保全作業に精を出したいと考えています。



食害防止テープは有効(16/01/06)

日々実施している保全作業は、徒労に終わっていないかの疑問も湧いてきます。湿原への土砂流入を防止するための沢の土砂の浚渫などを繰り返していると、1ヶ月も経っていないのにマタかという気にもなります。空しいと感じることすらあります。しかし放置すれば間違いなく湿原へ土砂流入という事態を招きます。抜本的な解決は、上流域の下層植生の復元しか無いのですが、実施には多くの問題があります。しかし、左のテープ巻き（この部分は永原小学校の児童が行ってくれた）の写真が保全作業の効果の一例です。テープを巻いた木は食害を受けていません。これは森全体に当てはまります。テープを巻いた木は、1本たりとも食害に遭っていません。

こうした保全作業の他に調査も欠かせません。昨年から力を入れているものにユキバツバキがあります。「北分岐」から「アカガシの森」一帯に広く分布していますが、このツバキがどれくらいの株数有り、どのような特性を持っているのか、何故この地帯に密集しているのかを突き止めるための調査です。全体で 9,000 株くらいあるのではと推定していますが、現在約半分にタグ付けが終わり、残りを今年も実施します。経費も人手も大変ですが、このような大規模調査は全国的にも超珍しいものだと思います。



残雪の中タグツケ作業をする会員(15/12/19)



ミヤマウメモドキを啄むツグミ(16/01/06)



実が食い尽くされたソヨゴとミヤマウメモドキ(16/01/10)

今秋は森の木の実とくに湿原のミヤマウメモドキは 2009



ソヨゴの実を銜えて飛び立つツグミ(16/01/09)

年以來の豊作でした。ミヤマウメモドキの実は例年 2 月中旬頃まで残っており、野鳥には評判が悪く思っていました。どうしてどうして・・・。100 羽を超えるツグミの大群が押し寄せ数日で丸裸になってしまっています。

2016 年の「守護岩詣で」は、2007 年の少ない積雪以來の少雪で楽々と登頂でき好天ということもありゆったりと、この 1 年の保全作業と来訪者の安全を祈願いたしました。



「守護岩」で乾杯!!(16/01/01)